

(PDF版・7の3)『教会教義学 神の言葉Ⅱ／3 聖書』「二十一節 教会における自由——二 言葉のもとでの自由」

(文責・豊田忠義)

「二十一節 教会における自由——二 言葉のもとでの自由」 (480-490 頁)

「二 言葉のもとでの自由」

「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の「神の言葉」は、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」(換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性)の関係と構造(秩序性)に連帯し連続し、その秩序性におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉〔区別を包括した同一性〕」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした(聖書を媒介・反復することを通して)第三の形態の神の言葉である全く人間的な「全体としての教会〔共同体〕に対してだけでなく」、その成員である個人としての人間(個体的自己としての人間)のところに、すなわち「特定の肢体、成員、この者あるいはあの者のところに〔イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、すなわち神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて、終末論的限界の下で〕来る」(Iコリント13・8以下)。したがって、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書においては、わたしは、わたしの生まれながらの〔その生来的な自然的な「自然的人間」の、その人間性、その〕個性の中で誰であり、何であるかということ……は問われていない」、「聖書においては、神の言葉との特別な一致が出来事となって起こる個々の決断とその人間性における、神の言葉に対する在り方、態度が問われている」。言い換えれば、聖書においては、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいた、すなわち第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として(聖書を媒介・反復することを通して)、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、それへの他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣

人愛」(通俗的な意味での「隣人愛」ではなくて、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、すなわち教会自身と世のすべての人々が純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝え)という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指して行くその人間性、個性、決断における在り方、態度ということが問われている。したがって、あの「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」という連関と循環における純粋な教えとしてのキリストにあつての福音の告白・証し・宣べ伝えが、「もろもろの誠命中の誠命、われわれの浄化・聖化・更新の原理、教会が教会自身と世〔のすべての人々〕に対して語らねばならない一切事中の唯一のことである」(『福音と律法』)。

そのような訳で、「わたしは、わたしが洗礼を受けた際に受け取ったイエス・キリストの名をもって呼びかけられているのであって」、「わたしの〔生来的な自然的な〕人格的な標識としての名でもって呼びかけられているのではない」。したがってまた、「わたしに対して、わたしの人格性の気高さあるいは惨めさが問われているのではなく」、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の「神の言葉〔それ故に、具体的には、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書における神の言葉〕から新しく生まれた〔われわれ人間の、わたしの更新を可能とするのは、「今日に至るまで罪人の手に渡され・十字架につけられ・死んで甦られ給うたイエス・キリストにある復活の力だけである」〕人間としての現実存在における、その精神的——身体的な現実存在における、その母の胎内から死に至るまでの彼の生涯における、その人間性、個性、決断における、神の言葉に対するその在り方、態度が問われている」。この「全体性の中でのわたしに対して、〔起源的な第一の形態の〕神の言葉の決断が下されており、この全体性の中でのわたしは、〔起源的な第一の形態の〕神の言葉〔それ故に、具体的には、第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書〕を通して生まれかわったのである」、「この全体性の中で、『からだと魂をもって、生きるにも死ぬにも』、わたしは『わたしの愛する救主イエス・キリストのもの』である、またキリストのからだにつける生ける肢体である」、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性における「特定の肢体、成員、この者あるいはあの者」としての個人としての人間(個体的自己としての人間)である。このことが、徹頭徹尾神の側の真実としてのみある、主観的属格として理解されたローマ3・22、ガラテヤ2・16等のギリシャ語原典「イエス・キリスト<の>信仰」(「イエス・キリスト<が>信ずる信仰」)による「律法の成就」・「律法の完成」そのもの、すなわち「神の義、神の子の義、神自身の義」そのもの、それ故に成就・完了された個体的自己としての全人間・全世界・全人類の究

極的包括的総体的永遠的な救済（平和の概念は、この包括的な救済概念と同じである）そのものである「イエス・キリストを信じる信仰である」——『私がいま肉にあって生きているのは、私を愛し、私のために御自身をささげられた神の御子の信じる信仰によって、生きているのである。（これを言葉通り理解すれば、＜私は決して神の子に対する私の信仰に由って生きるのではなく、神の子が信じ給うことに由って〔徹頭徹尾神の側の真実としてのみある主格的属格として理解された「イエス・キリストが信ずる信仰」によって〕生きるのだということである）』（ガラテヤ二・一九以下）。〔それ故に、〕（中略）自分が聖徒の交わりの中に居る……罪の赦しを受けた（中略）肉の甦りと永久の生命を目指しているということ——そのことを彼は信じてはいる。しかしそのことは、現実ではない。……部分的にも現実ではない。そのことが現実であるのは、ただ、われわれのために人と生まれ・われわれのために死に・われわれのために甦り給う主イエス・キリストが、彼にとってもその主であり、その避け所でありその城であり、その神であるということにおいてのみである』（『福音と律法』）。その時、生来的な自然的な「自然的人間」は、「新しく生まれかわったのである」。ここに、「神の言葉から新しく生まれた人間としての現実存在がある」。

イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づいて、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の「神の言葉」が、「人間の言葉として〔第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している聖書を通して〕人間のところに来る過程のあの目標と終わりが、可視的になって来る……」、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している聖書（預言者および使徒たちのその最初の直接的な第一の「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」）およびその聖書を媒介・反復することを通した第三の形態の神の言葉である教会の＜客観的な＞信仰告白および教義 Credo として、「可視的になって来る……」。このような訳で、「わたしは、この啓示を感謝と祈願をもって受け取るであろう」。したがって、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「信仰〔客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」〕を度外視しては、それであるからイエス・キリスト〔客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」〕を度外視しては、わたしにとってこの〔啓示の〕真理はその全体性の中で……隠されており、……隠されたままであり続けるであろう」。したがってまた、「信仰は、その都度、……わたしが神の言葉の決断との一致の中で〔あの「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」という連関と循環において〕決断する個々の決断……の事柄である」。言い換えれば、「信仰」は、実体ではなく、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と

信仰の出来事」を通して「贈り物として与えられる、後ろを振り返り見る回顧と前方を望み見る展望であり」〔「實在の成就された時間」としての「キリスト復活の四〇日（使徒行伝一・三）」、「まことの過去」と「まことの未来」を包括した「まことの現在」の想起と、「復活されたキリスト」の「再臨」（終末、「完成」）の待望であり〕、〔聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方
で、〕 **その都度繰り返し受け取るべき贈り物である**」。このような仕方
で、第三の形態の神の言葉である「教会が、あらゆる時に、あらゆる場所で、〔起源的な第一の形態の〕神の言葉〔それ故に、具体的には、イエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している聖書〕を通して基礎づけられ、保持され、支配されるということの真理」は、教会が、実体化して「見るようにすること、提示しまとめて示すことはできない」。すなわち、第三の形態の神の言葉である教会は、「ただそのことを、……〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて〕神によって啓示された真理として信じることがゆるされるだけである」。したがって、その出来事が生起した時には、第三の形態の神の言葉である教会は、そのことが、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事が起こることによって、そのことが出来事となって起こることに対して感謝し、〔絶えず繰り返し〕それが出来事となって起こることを祈り求めるのである」。したがってまた、第三の形態の神の言葉である教会は、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書（「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方であるイエス・キリスト自身によって直接的に唯一回特別に召され任命された預言者および使徒たちのその最初の直接的な第一の「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」）およびその聖書を媒介・反復することを通した教会の＜客観的な＞信仰告白および教義 Credo「以外のほかのものについて語ることはできない」。

聖書においては、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通した第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する、その現にあるがままの現実的な人間存在における「その精神的——身体的な現実存在における、その母の胎内から死に至るまでの彼の生涯における、その人間性、個性、決断における、神の言葉に対するその在り方、態度が問われている」のであるが、「しかし、ここでもう一度、〔その人間性、個性、決断における、神の言葉に対するその在り方、態度から逸脱した〕、右および左に向か

つての……転倒をともなった……偽りの弁証法が姿を現わす」。すなわち、一方で、「楽観主義的なわがまま勝手さにおける偽り……が姿を現す」。例えば、その典型であるシュライエルマッハーにとって、「教会とは、『ただ〔生来的な自然的な人間の自由な内面の無限性、人間の自由な自己意識の類的機能を認識し自覚した〕自由な人間的行為を通して発生し、またただそのような自由な人間的行為を通して存続することのできる共同体』であり、『敬虔性と関連した共同体』である」、「近代主義的に、人間が、誰かの呼びかけを受けることなしに〔すなわち、啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、それに聞き教えられることを通して教えるということをしていないで〕、（中略）人間が自分を相手に自分で独り言を言うことである」、それ故に「教会の宣教は、『教会』と呼ばれる人間的な共同体の一つの必然的な生の表現である」、説教者の「彼が、自分で自分を知っていると考える彼自身である個々の信者〔説教者〕の信仰告白〔換言すれば、彼の人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された彼の意味世界・物語正解・神話世界、「存在者としての神」、その神の啓示〕としての、「自己表現としての宣教である」。この時、フォイエルバッハによる、次のようなキリスト教批判は、「新約聖書の釈義に役立つ新しい哲学的な鍵」を「前期ハイデッガーの哲学原理に見出し」、「神話的世界像と神話的人間像は時代の経過とともに、われわれの前から消え去ってしまう」し、われわれの「眼前存在」、現前性は「近代的な世界像、人間像にあるから、神話形式のままでは、新約聖書の言表、すなわち語られた内容の表現は理解できないから、それは非神話化されなければならない」としたブルトマン（その学派）に対して、「……『いわゆる〔彼の理性的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された彼の意味世界・物語正解・神話世界、〕存在者レベルでの神への信仰は、結局のところ〔キリストにあつての神としての〕神を見失うこと』……」になるから、「それよりは『むしろ無神論という安っぽい非難を受け入れた方がよい』……」と「揶揄」・批判したハイデッガー自身と同じように、まさに、客観的な正当性と妥当性をもった、根本的包括的な原理的なキリスト教批判を構成している——近代主義者のシュライエルマッハーやブルトマンの自然的な信仰・神学・教会の宣教における思惟と語りの水準は、まさに、「人間の内的生活は、自分の類・自分の本質に対する関係における生活である。人間は思惟する、すなわち人間は会話をする、人間は自分自身と話をする。動物は自分以外の他の個体がいなければ類的機能をひとつもはたすことはできない、しかし人間は他人がいなくとも考えるとか話すとかという類的機能……を果たすことができる」というそれであり、「もし君が無限者を思惟するならば、そのとき君は思惟能力の無限性を思惟し且つ確証しているのである。そして、もし君が無限者を情感するならば、そのと

き君は感情能力の無限性を情感し且つ確証しているのである。理性の対象とは自己自身にとって対象的な理性であり、感情の対象とは自己自身にとって対象的な感情である」というそれであり、「(中略) 神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」というそれであり、「(中略) 神の啓示の内容は、〔キリストにあつての〕神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神から発生した……。 (中略) こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない!』……」というそれであり (フォイエルバッハ『キリスト教の本質』)、「神とはまさに、人間の想像能力・思惟能力・表象能力の本質が、現実化され対象化された……絶対的な本質 (存在者)、……と考えられ表象されたもの以外の何物でもない」というそれである (フォイエルバッハ『フォイエルバッハ全集第12巻』「宗教の本質にかんする講演 下」)。また、他方で、「悲観主義的なわがまま勝手さにおける偽り……が姿を現す」。それは、「楽観主義的なわがまま勝手さにおける偽り」と同じように、啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造 (秩序性) に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、それに聞き教えられることを通して教えるということをしないうで、第二の形態の神の言葉である「聖書は〔近代を〕生きるために必要なことを言いつくしていない」、聖書は近代的な情報が不足している、近代的な人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍が不足しているという「最悪の懐疑と無関心という悲観主義的なわがまま勝手さにおける〔その人間性、個性、決断における、神の言葉に対するその在り方、態度から逸脱した〕、……転倒をともなった偽りの姿である」。近代主義的プロテスタント主義的キリスト教の信仰・神学・教会の宣教は、「キリストの永遠のまことの神性の告白を信用しない」、神性否定のキリスト論を展開する、人間的側面だけを強調する、イエス・キリストにおける「啓示の出来事」をその死 (十字架) と復活の出来事との全体性において認識するのではなく前者だけを強調するという「最悪の懐疑と無関心という悲観主義的なわがまま勝手さにおける〔その人間性、個性、決断における、神の言葉に対するその在り方、態度から逸脱した〕、……転倒をともなった偽りの姿を現す」。この「最悪の悲観論者は大体常に、過去において〔楽観主義者と同じように、人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された意味世界・物語世界・神話世界、「存在者レベルでの神」、その神の啓示、自然的な信仰・神学・教会の宣教を目指した者として、〕楽観主義者であったものである」。このような訳で、両者は「偽りの弁証法」として〈表裏〉をなしている。

そのような訳で、「われわれは、確かに神の言葉を通してわれわれ自身のことが問われている」。「神の言葉」は、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて終末論的限界の下で与えられるものとして、それは、「その都

度、全く特定の一回的な、独一無比な言葉である」。この「特別な出来事」は、「主要なこととして、本質的に、ただ上から〔神の側から〕、ただイエス・キリストから、実在であるがゆえに、実在であることによって、見て取ることができる」。その「特別な出来事」を、「楽観主義的に人間的に確かめ得るとする者、あるいは悲観主義的に確かめ得ないと絶望する者」は、「等しく、事柄そのものを見過ごしてしまう……」。「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の「神の言葉」は、「偶発的な同時性、すなわち特定のアノトコロデアノ時ニ〔時間・空間〕が、特定のココデイマ〔時間・空間〕となる」。その「神の言葉」は、「その都度、全く特定の一回的な、独一無比な言葉である」が、しかしまた、その「神の言葉」は、「神の口を通して語られて、同時的である〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」と、その「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいて与えられるものとして、同時的である〕」——「このことは、神の言葉は一つであること、すなわちきょうも、きのうも、いつまでも変わらない、ということの意味している〔「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおける連続性を意味している〕」、換言すればそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している聖書およびその聖書（預言者および使徒たちのその最初の直接的な第一の「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」）を媒介・反復することを通してイエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指す第三の形態の神の言葉である教会の＜客観的な＞信仰告白と教義Credoの現存を意味している、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「キリスト教に固有な」類と歴史性の現存を意味している。すなわち、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している聖書（預言者および使徒たちの時間・空間）を媒介・反復することを通して、「全く特定の一回的な、独一無比な言葉〔啓示ないし和解の實在〕そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉」である「イエス・キリストの特定のアノトコロデアノ時ニ」（時間・空間）は、バルトの、あなたの、私の「特定のココデイマ」（時空）と交点を結び得るのである。言い換えれば、このような「時の全くの厳格な相違性の中で、神の言葉は一つであり、同時的である（イエス・キリストは、きょうも、きのうも、いつまでも

変わることがない」。「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として（聖書を媒介・反復することを通して）、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、それに対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同の教会」共同性を目指して行くという「その決断とその人間性における神の言葉に対するその在り方、態度」は、「われわれの生、われわれの生活全体が、神と共なる生、生活としてあることが明らかになって来る」それとしてある。

「聖書に含まれているどの聖句も潜在的に、私自身の生の具体的な信仰の出来事である」——このことが、「神の啓示について証言している神の言葉〔第二の形態の神の言葉である預言者および使徒たちの聖書的啓示証言、聖書の個々の聖句〕……によって問われている〔イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命された預言者および使徒たちのその最初の直接的な第一の「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」、聖書の個々の聖句によって問われている〕」。「わたしは、もしわたしが旧約聖書あるいは新約聖書の証言の最も単純な構成要素を〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて〕自分のものとするならば、無限にはるかに報告することになるのでないような何かを、わたしに関して報告することができるであろうか」。神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」と、その「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいて終末論的限界の下で与えられる信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的な主観に実現された神の恵みの出来事は、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している「聖書の証言の最も単純な構成要素を自分のものにされること、そのことによって自分のものにするのである」。「われわれ自身の生の中での信仰の出来事は、事実、イエス・キリストの誕生、苦しみと死、甦えり、昇天、アブラハム、イサク、ヤコブの信仰、イスラエルのエジプトからの脱出、荒野を通過の旅、カナン侵入、聖霊降誕日における聖霊の注ぎ、異邦人のもとへの使徒たちの派遣、以外の何ものでもあり得ない」。このような訳で、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会（すべての成員）は、「イスラエルが紅海をわたった際に、しかしまた金の小牛を拝んだ際に、イエスがヨルダン川で洗礼を受け給うた際に、しかしまたペテロが主を否定し、ユダが主を裏切った際に、最高に個人的にその

場に居合わせており、そのことに参与していたということ」、また聖書にある「姦通の女」においてイエスが語った「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」という、時代を超えてすべての人間の内面の普遍性に届く言葉を聞いた際に、「最高に個人的にその場に居合わせており、そのことに参与していたということ」——「これらすべてのこと以上に」、換言すれば「今日、ここで、私自身に関して出来事として起こったこれらすべてのこと以上に」、「もっと重要な、もっと切実な、もっと真剣な、もっと現実的な経験をしたことがあるであろうか」。したがって、バルトは、『証人としてのキリスト者』で、最終的に離脱した宗教的社会主義に対して、「そこでの人間の困窮と人間に対する助けとが、聖書が理解しているほどには、真剣に理解されておらず、深く理解されて」いなかったと述べて、その宗教的社会主義を、客観的な正当性と妥当性を持って、根本的包括的に原理的に批判したのである。「問題に満ちた非本来的な失われたわれわれの時間〔古い時間・世〕の中で」、「まことの過去」と「まことの未来」を包括した「まことの現在」としての「キリスト復活の四〇日（使徒行伝一・三）」、「キリスト復活四〇日（使徒行伝一・三）の福音」、「実在の成就された時間〔新しい時間・世〕」、「実在のイエス・キリストにおける啓示の時間〔新しい時間・世〕」こそが、われわれ人間の、その個と現存性（個の時間性、自己史、個体史）——その類と歴史性（類の時間性、人類史、世界史、歴史）の生誕から死までのすべてを見渡せ、また「この世の偽り、通俗の偽りを偽りと呼び、世俗的真理をも正直に受け取ることができる」場所であり、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学が、自然的な信仰・神学・教会の宣教を目指す時、そこにおける神が、福音が、人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された「存在者レベルでの神」へと、彼の意味世界・物語世界・神話世界へと、「理念へと、有神論的形而上学へと、われわれに管理されるプログラムへと、鋭さをなくした十字架象徴論へと、イエス・キリストはたかだか暗号にすぎない神秘主義へと変わって行く」ことが見渡せる場所である。